



TITLE:

対象関係論的心理療法から捉えた
青年期女性の分離体験(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

根本, 真弓

CITATION:

根本, 真弓. 対象関係論的心理療法から捉えた青年期女性の分離体験. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13153>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	根本 真弓
論文題目	対象関係論的心理療法から捉えた青年期女性の分離体験		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、対象関係論的心理療法を実践していく中で捉えられた青年期女性の分離体験に着目し、患者の内的世界における精神病理について明らかにし、その臨床的なアプローチについて論じたものである。本論文は第1部「研究の基盤」、第2部「研究の展開」、第3部「総合的考察」の三部により構成されている。</p> <p>第1部「研究の基盤」では、本研究の研究対象である青年期女性について、先行研究をもとに歴史的、社会的・発達の・身体的・心理的観点から全体像を概観し、本研究の理論的基盤となる対象関係論的心理療法の臨床モデルを提示する。</p> <p>第1章では、まず青年期の定義が行われ、青年心理学や社会心理学的視座から捉えた青年の健常発達や精神病理について先行研究が概説された。第2章では、精神分析の基本概念に基づく精神分析的発達論や、青年期が乳幼児期の心的発達の再現であるという Sigmund Freud の説等について先行研究をレビューした。第3章では、分離体験によってもたらされる心的世界に関する理論展開を、母子観察に基づく理論（Margaret Mahler, John Bowlby）と、精神分析臨床実践に基盤を置いた心的発達論（Melanie Klein, Wilfred Bion）について概観し、特に本研究の主題である「分離体験」の淵源を遡って Bion の理論に注目し、欲求不満への不耐性が精神病理と繋がることを描写した。第4章では、本研究の臨床実践手法であり臨床的理解の基盤となる Klein - Bion の重要概念をレビューし、その臨床思考に依拠する「対象関係論的心理療法」の基本設定や面接過程について特徴を概説した。</p> <p>第2部「研究の展開」では、筆者が行った臨床実践をもとに、内的対象関係や内的空想、心的機制が詳述され、心的水準の異なる青年期女性の分離体験が探究された。事例は精神病理の重篤なものから順に取りあげられており、分離によってもたらされる情動の質的・量的相違が、症状形成や精神病理に連続していることが詳らかにされる。</p> <p>第5章では「分離の痛みの排泄」が主題となった2事例を取りあげ論考した。第6章では、解離と離人化による分離の否認が行われ、他者との情緒的交流が回避され続けていた事例から、心的苦痛をコンテインする対象が不在であるだけでなく、拒絶や非難によって苦痛の出口が塞がれた時、解離という病理に接続されることを描き出した。第7章では、過食や下剤の使用、性的問題行動を呈する事例から、その行為が母親への分離不安の「打ち消し」「置き換え」であり、母親への依存欲求と攻撃的欲動から派生した迫害的罪悪感と懲罰であったことを明らかにした。そして母親からの心的分離が達成された時、身体を内包した自己受容が可能となることを論じた。第8章では、「分離体験によって生じた内的対象喪失と取り入れ同一化」を主題とする2事例について考察した。第9章「分離の保留～ためらいの時～」では、児童文学『西の魔女が死んだ』（梨木香歩, 2001）を素材として、健常な思春期女性の分離について考察した。</p> <p>この第2部において探究された臨床事例から見出されたのは、第二性徴を経て母親からの分離と自己の確立が心的課題となる時、乳幼児期の愛着対象である母親との分離体験が内的母親対象の喪失として蘇り、心的苦痛の耐えられなさが様々な防衛機制を発動させ、身体化・行動化・症状化といった精神病理と連結され、心的発達を妨げていたという臨床的事実である。この乳幼児期の未消化なままに置かれていた喪失</p>			

体験が、セラピストとの転移関係を通して再体験されるとともに、取り扱い可能な情動的経験に変形され、失われていた良い母親対象の再取り入れを通して、分離体験のワーキングスルーが可能になることを明らかにした。「総合的考察」では、この私的経験を公共的経験へと変形すべく考究し、青年期女性の心的世界の特徴が論考される。

第3部「総合的考察」では、「研究の基盤」で述べた歴史的・理論的背景を礎石としつつ、「研究の展開」における青年期女性の事例から見出された分離の困難さの要因について包括している。ここに本研究の結果が記され、青年期女性の分離体験の本質が究明される。**第10章、第1節**は、「**逡巡期 Hesitating stage の提案**」と題して、本研究から見出された青年期女性の分離体験を発達段階に位置づけるという提言と総括を行った。青年期女性は、第二次性徴によって母親と同じ女の身体へと変化する時、乳幼児期に未消化なまま母親との間に留保されていた、愛と憎しみの情動的関係に決着をつけなければ、次の発達段階であるエディプスの性愛に到達できないとの筆者の考えを示し、「潜伏期」から「性器期」の間に「逡巡期」を置くことを提言した。**第2節「青年期女性における母親からの分離の困難さ」**では、第1節で示した提言、「逡巡期」に展開する心的世界をより鮮明に描き出し、青年期女性の特異性を明示するために、「分離への意識がもたらす幼児的依存感情の再燃と性愛的感情」「性と連接された身体的変化がもたらす内的空想」「母親との関係における、取り入れと排泄の二重性」「外傷的分離体験と孤独」の4つの観点から再考し詳述した。

第11章「青年期の分離を促すセラピストの機能と技法、そしてそのワーキングスルー」では、分離の主題を抱え「逡巡」する青年期女性の対象関係論的心理療法における、セラピストの機能と技法について筆者の考えを示した。また、発達途上にある青年期女性が面接の中でおこなう心的作業の到達点はどこにあるのか、何をどこまでワーキングスルーすることが可能なのかについて論考し、青年期女性における面接終結のクライテリアの定式化を行った。

本研究で達成されたことは、青年期女性の分離体験を内的世界から捉え、そこで生まれる内的空想と精神病理の解明を通して、青年期女性の心のありようをより深く探究することであり、その理解を心理療法実践へと接続したことにある。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、対象関係論的心理療法を実践していく中で捉えられた青年期女性の分離体験についての臨床研究である。精神分析の一つの学派である対象関係論の観点から、筆者自身が行った心理療法の詳細を提示しつつ、それらの病態を対象との分離という観点から理解し、まとめ上げている。そこに見られる基本的な視点は、幼児期に生じた分離の問題が十分に扱えないままに思春期にいたった場合、それが治療場面において再燃し、さまざまな精神病理が出現するというものである。そして本論文ではその分離の痛みや苦しみがどのように防衛され、またどのような症状を形成するか、そしてそれがどのような形で治療的に扱われていくかが複数の治療例をもとに詳しく論述されている。いわば筆者の精神分析的な心理療法家としての業績の集大成とも言え、またそこにはいくつかのオリジナルな概念も含み込まれ、その意味で精神分析学への多大な貢献を及ぼす可能性を秘めた貴重な論文と言える。

精神分析学における対象関係論は、それ自体が非常に広い範囲の理論を含むが、筆者が主として基づくのは Melanie Klein の創始したクライン学派理論であり、そこには後継者 Hanna Segal や Herbert Rosenfeld、同学派から派生してさらなる理論的な進化を遂げた Wilfred Bion や、我が国の精神分析家松木邦裕の理論である。そして患者の病理の理解や分析的関わりを行ううえで主として扱われる概念が、投影同一化や取入れ、排泄といったいわゆる原初的な防衛機制であり、それが分離の再燃を体験するクライアントによりどのように用いられ、また治療者が解釈という手段を用いていかにそれらを扱っていくかが本論文で詳述される。そこでの治療者の姿勢は一貫しており、言わば中立的な受け手となりクライアントから分裂・排除され投げ込まれる感情やファンタジーを受け取ることである。これはいわゆるブランクスクリーン・モデルに準拠した治療方針であり、治療者は中立性と匿名性を保ちつつ治療者に対面することで、患者のさまざまなファンタジーや情緒の投影される幕として働くという精神分析における基本的な考え方による。

この根本氏の論文において特筆すべきなのは、特に思春期の女性の病理を扱う際に、従来論じられることのなかった「逡巡期」という新しい概念を導入している点である。最終的な精神的分離を前にした青年期女性が、初期の分離体験によって失われていた母親対象の再摂取とそこからの再分離を達成し、身体的変貌と性的自己を受け入れ、成熟した女性として異性愛へと到達するには、依存と攻撃感情に彩られた乳幼児期の情動的経験を現実化し、良い母親対象を再獲得するための期間として「逡巡期」を必要とするというのが筆者の主張である。そしてこの分離体験のワーキングスルーは、女性が異性との安定した性愛関係や愛情関係を築くための基盤となるだけでなく、赤ん坊の母親として、また赤ん坊の激しい依存感情や破壊的攻撃感情にもちこたえる精神的成熟と忍耐力を付与するのだと論じる。

このようにクライン派の理論を縦横無尽に援用しつつ自らの臨床に照らしてそれらの理論の不足部分を補い、そこに新たな概念を注ぎ込んでまとめあげた点は極めて評価されるべきものと言える。ただし筆者自身が論文中に言及しているように、「逡巡期」以降のエディプス・コンプレックスや異性愛への移行部分、青年期男性、父親との関係、文化的・社会心理的な観点については未達成部分を残していることも確かである。

口頭試問では、筆者の視点がクライン派にかなり限定されることで、投影同一化や排泄といった用語が多用され、臨床的な思考や理論構成がやや画一的になり、断言的な書き方も目立つという点が指摘された。また論文において記述された病態レベルの異なる 7 例のケースについて、その孤独感への耐性、矛盾を受け入れる準備性などの点でどのような差異が見られるのか、そしてそれが治療的介入にどのように反映されるのかといった点がさらに細かく論じられてもよかったという点が指摘された。しか

しこれらの点は本論文の本質的な価値を決して損なうものではなく、むしろ本研究の将来の発展形に組み込まれるべき新たなテーマであると判断された。

なお平成 30 年 1 月 31 日に口頭試問を行った結果、筆者の上述の問題点についての理解やそれに関する受け答えも極めて満足 of いくものと判断された。よって本論文は京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断され、博士（教育学）の学位論文として十分価値あるものと認められた。また筆者は同時に施行された学識試験にも合格した。また本論文は、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降